

兒童藝術と彫塑展覽會

廣原社 朝 蔭 其 明

兒童藝術文化普及の聲が高まるにつれて、童話・童謡・童話劇自由畫といったやうな鹽梅に、兒童に對する大人のそうした方面の注意が、いろ／＼な形式を取つて現れ、兒童の藝術的精神を保育、涵養しやうとする、眞面目な試み、意義ある運動が、近ごろ、著しく盛んになつて來た。

一體、我等が諸種の運動を起して、兒童に藝術教育を普及せんと努力する所以は、單に兒童の藝術的精神の保育に資せんとする、兒童本位の仕事のみ見る事は出來ない。大人の眼は塵々理智の爲に曇を生じてゐるものである。兒童の作品を見ることによつて我等は、曇つた眼を洗ひ、忘れられてあつた自己の本體を見る事が出来るのである。こゝに兒童の繪がある。進行しつゝある汽車、地に豆を拾ふ鳩、それらが何らの制縛を受けることなしに、そして些の

侵蝕をもされずに、のび／＼した、自由の精神こころの働きのまゝに描寫されてゐたとき、そのいつはりない感覺の表現は人間本然の姿である。そこに溢るゝ清新味と、惹きつけるやうな眞實味を御覽なさい。嘗て私は或る幼稚園の一幼兒の粘土塑像の作品に、古代ギリシヤの立派な藝術品に譲らぬ藝術的眞味を有するものを見た。その豊かな想像力、鋭い觀察、大膽な表現に私は驚嘆したのであつた。而もこれは、幼兒こどもなればこそなし得た創作であらう。これ等を見ても、いかに後天的の經驗や習慣や理智等が、我等の藝術創作の上に累を及ぼしてゐるかを、はつきり教へられるのである。

更に進めて社會的に之を眺むる時は、我等は兒童の作品を通じて、彼等兒童の中に取り入れられた社會性こころを、我等

大人の中に取り入れられた社會性との相違を對比せしめる時、我等は環境に對する、われらの正しい批判が確立することにもなるであらう。貴族、資産階級の兒童と、勞動階級若くは細民階級の兒童乃至特種區域の兒童との作品を對比する時は、階級が及ぼす藝術精神の發動狀態の差違が見られる。都會の兒童と地方の兒童との作品を對比しては、文化の差違による藝術の傾向が見られると共に、郷土藝術の萌芽現象が窺ひ知られる。又、親の職業によつて比較する時は、親の職業心理が兒童の心の上に與へられたる影響を知ることが出来る。

茲に我等曠原社が兒童彫塑展覽會を開くことになつたのも如述の意味からみて非常に有意義な事であると思ふ。我等は此際先づ東京市内の小學校の兒童の作品よりはじめ、逐次全國に向け、なるべく回数多く、定期的に、而も永續的に展覽會を開催して、兒童藝術教育の爲に陰に陽に盡力する覺悟である。尙、適時には對校的作品展覽會を開き、優秀な作品に對しては、感賞の意を表する計畫もなつてゐる。

新しく茲に喋々するまでもなく、人間の精神及び生活は、文化の進展に伴つて、益々立體化されていく事は明らかな事である。従つて藝術も亦、漸次平面より立體的に進歩することは、人間の藝術に對する鑑識眼が高まり、理解力が強くなるにつれて、當然來るべき現象であらう。

こゝまで來た時に、ふと振り反つて、現在我國小學校兒童の藝術教育の資料として彫塑が如何に取扱はれてゐるかといふことに氣がついた時、我等は失望せずにはいられない。自由畫教育には相當に眼覺めた教育をしてゐるに拘らず、彫塑の方はてんで省みられてない有様である。現在のやうに、一塊の粘土を兒童に與へ、教師は自己の經驗を小手先に働かせて、林檎は斯くあるべきもの、茶碗は斯くの如きものといふ風に藝術を理窟から教へることが藝術教育の上に何の交渉があらう。その作品は生命を失ひ、兒童らしさの新鮮味を逸した、藝術的價値を滅殺した、實に干枯びたいやなものになる。勿論彫塑藝術は繪畫藝術よりも、立體的であるだけによけいに創作の上にも骨が折れ、鑑識にも難であるけれども、繪畫よりも更に深刻なる藝術眞味

を有するものであるが、一方、それだけ創作に興味もあり、藝術精神の保育に資するところも蓋し大きいと思ふのである。

そこで我等は、この運動に關して、學校當事者の熱心なる賛助を願ひ、現在の單なる手工さして取扱つてゐるものを、價値ある藝術的創造のレベルにまで引上げ、努力をしなければならぬ。これにはさうしても、先づ第一に直接兒童の教育に當る擔當者の頭腦に藝術に對する理解、咀嚼が必要であらう。我等は近く開催するこの兒童彫塑展覽會には、學校當事者一般父兄の方、特に各小學校擔當者の來覽を切望して止まないのである。近き夏季休暇には兒童と彫塑藝術に關する講習會を開く計畫もなつてゐるが、それに就てはいづれ通知を發するでしやう。こもあれ彫塑藝術に對して、當の兒童諸君はもとより、擔當教師、父兄みなさまが、これは自分達の仕事であるといふ自覺の下に、同情と誠意をもたれるやう、希望するのである。(文責在記者)

曠原社の兒童彫塑展覽會は來る七月六日から五日間、上野竹の壺美術協會で開催されます。豫定は今秋であつたそうですが、この新運動の聲が世に投ぜられるや、非常な反響を齎し、そのため秋まで待つことが出來ぬやうな羽目になつたのだそうです。(記者)